

【報告】

意欲的に体を動かして遊ぶ子どもの育成を目指して —園内研修と家庭との連携を意識した運動遊びの実践を通して—

山下 晋* 中村和美** 内木 薫*** 浅川正堂****

要 旨

本研究では、幼稚園において大学、家庭と連携をして継続的な運動指導を行い、子どもたちの育ちを支える運動遊びのあり方を検討した。その結果、保育者にとっては、運動プログラムの充実、指導力の向上が見られた。また、園児にとっては、運動意欲が高まり、体の動かし方が上手になったほか、社会性や非認知能力が高まっていくことを感じる事ができた。合わせて、「運動遊びを楽しみにする雰囲気が増した」「とび箱など年長が取り組んでいる姿を見て年中も真似して取り組んでいた」というように、園全体に運動遊びを楽しむような環境が生じた。

キーワード：幼児期、運動発達、多様な経験、保育者の役割

I. はじめに

幼児期は体を動かす遊びを通して、多様な動きが獲得され、動きを繰り返すことによって、動きが洗練化されていく。¹⁾ また、体を自由に動かし、さまざまな動きができるようになることで活動意欲が高まる。さらに、周囲の環境に主体的に関わるようになることで、社会性や認知力が育つ。このように、子どもの心身は相互に関連し合い発達していく。

愛知県の西三河地区にある高浜市立高浜幼稚園（以下：T園）では、自由時間に園庭で活発に遊ぶ園児がいる一方で、鉄棒や登り棒、ボール遊びなどを苦手とする園児や、どちらかといえば居座って遊ぶことが多い園児の姿が見られる。その結果、できる子どもとできない子どもの差が大きい「二極化」が顕著となっている。また、幼児の中には、座っていてもすぐに姿勢が崩れたり、保育者の話を集中して聞けない姿が見られるほか、鉄棒で回転している途中で手を離してしまうなど、本来、遊びを通して身に付く「自分の体の動きを認知する能力」に欠けている姿も見られる。さらに、目標に粘り強く取り組むことや、健康的な体づくりのために規則正しい生活習慣（食事や睡眠のリズム）を身につけて欲しいと感じられる幼児の姿も見られる。

保育者においては、日々の保育の中で、「園児の一人一人の発達にあった運動遊びの展開に自信がない」「個人差に配慮した園児の活動意欲、運動好奇心を高めるような工夫の仕方がよく分からない」と感じている。

T園に通う園児の保護者に対して行った「子どもの生活に関するアンケート」からは、下記のようなことが明らかとなった（表1）。

表1：T園に通う園児の保護者に対するアンケート結果

- ・子どもの体力・運動能力・遊びに関心はあるが、休日に親子で体を動かす機会が少ないと感じていたり、どんな遊びがよいのか、園で遊んでいる遊びを知りたい
- ・嫌いな食べ物について、家庭で少しでも食べてほしいと励ましたり、調理方法を工夫したりして食べさせようと努力している。
- ・テレビ・ゲームに費やす時間が2時間以上の子が多く、体を動かして遊ぶ時間の減少と就寝時刻の遅れの一因となっている。
- ・体力がないことや姿勢が悪いことなど気になる保護者が多い。
- ・幼稚園で体を動かすことが好きになってほしいと考える保護者が多い。

そこで、平成28年度、T園が目指す子どもの姿を「保育者や友達と自分から意欲的に遊ぶ子」とし、その内容を「①自分の身体を思うように動かすことを楽しむ」「②自分の目標をもって挑戦する」とした。

*岡崎女子短期大学幼児教育学科、**高浜市立高浜幼稚園 ***大和東幼稚園 ****若葉第一幼稚園

一方、保育者の目標を「子どもたちが運動遊びを通して、様々な活動に意欲的に関わり、取り組む過程に手応えや充実感を感じたり、自ら工夫したりする楽しさを味わえる環境構成や援助を家庭と相互協力をして行うことができる」こととした。

本研究では、T園の保育者が大学、家庭と連携をして、子どもが自分から意欲的に遊ぶために、さまざまな体育器具を用いた運動遊びの方法、子どもの活動意欲の高め方を学びながら、子ども一人一人の発達に合った援助や補助の方法を習得し、子どもたちの育ちを支える運動遊びのあり方を検討することを目的とした。

II. 方法

(1) 研究の対象

本研究の対象はT園の保育者と園児とした。T園の園児数（定員）は年長児70人、年中児70人、年少児60人、小学校に隣接する中規模園である。T園の教育目標は「集団生活を通して社会性を養い、心身ともに健やかで人間性豊かな幼児の育成を図る」とし、目指す子ども像を「なかよく元気な子」「思いやりのあるやさしい子」「自分から意欲的に活動する子」としている。

T園では、食育に力を入れており、園内にピーマンやナス、ミニトマトなどの夏野菜やサツマイモを栽培する畑があり、園児は草取り、水やり、収穫、調理を通して、生きる力を育てている。この取り組みには、保護者や近隣の方々もボランティアとして関わるなど、地域で子育てを行う環境である。年間計画には、七夕やひな祭りなど季節行事が豊富に含まれ、行事に関連した絵画や折り紙の制作を行っている。運動遊びは学年を中心に行われ、縄跳び、鉄棒、のぼり棒などの達成度を個人カードに記録し、取り組んでいる。

(2) 仮説と手立て

本研究の仮説と手立てを下記のように定めた。

①仮説

(ア) 子どもの発達や興味に合った環境を構成し、一緒に活動する中で、子どもができたときの喜びを共感し、十分認めていくことによって、園児自らやってみよう、できたという意欲や有能感をもち、運動が好きになるのではないかと。

(イ) 遊びを通して基礎的な動きを習得することで、学童期以降、挑戦したいスポーツに対して自分がイメージした動きができるのではないかと。

(ウ) 保護者の意識が高まることで、休日の過ごし方や自分の子どもの体の動かし方、運動への興味について考えたり、一緒に体を動かしたりする機会が増えるのではないかと。

②手立て

(ア) 子どもが基礎的な動きが身に付けられるように、年間計画を立て計画的に運動遊びを取り入れる。

(イ) サーキット遊びなどの運動遊びの実践事例をもとに、子どもの育ちと保育者の援助のあり方を探る。

(ウ) 運動遊びを通して、保育者の保育力を向上させるとともに、発達に合った運動遊びのあり方について共通理解を図る。

(エ) 保護者に運動遊びの方法や援助・補助の仕方を伝える。

(3) 研究の計画

本研究の期間は、平成28年4月から平成29年12月までとし、下記のとおり年間計画を作成して、運動遊びと保育者研修を行った（表2）。運動遊びは実施年次を徐々に増やしなが、月1回実施した。また、保護者に対し、運動遊びを通した子どもの成長について興味関心を高める機会とするために、運動遊びへの参加や補助を募り、実施した。

なお本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理規定に基づき、研究倫理委員会より承認を受けている（通知番号38）。

表2：平成28・29年度の年間計画

月	内 容
4月	○年間計画作成
5～7月	○園児（5歳児） ・講師による運動遊び（とび箱、マット、鉄棒、集団遊びを中心に実施） ○保育者 ・運動遊びのプログラムと援助、補助のあり方の習得 ・自由遊び・全体活動について検討
8月	○保育者 ・4か月の振り返り ・4歳児の運動指導について検討
9～12月	○園児（4・5歳児） ・講師による運動遊び

	(縄跳び、サーキット遊びを中心に実施) ○保育者 ・運動遊びのプログラムと援助、補助のあり方の習得 ・自由遊び・全体活動について検討・3歳児の運動指導について検討
1～2月	○園児(3・4・5歳児) ・講師による運動遊び (縄跳び、サーキット遊びを中心に実施) ○保育者 ・運動遊びのプログラムと援助、補助のあり方の習得 ・自由遊び・全体活動について検討 ・取り組みのまとめ方について検討
3月	○まとめ ・反省点及び今後の課題の検討

Ⅲ. 結果及び考察

(1) 5歳児の実践について

①マットやとび箱を使った遊び

5歳児になると、約30分は集中して全体活動ができるため、まずは5歳児から講師による運動遊びを、隣接する小学校の体育館で、1回あたり45分間(8:45～9:30)実施した。広い体育館で思い切り鬼ごっこやかけっこをしても保育者の指示が届きやすいうえ、子どもたちが今まで見たことがない体育器具に触れること活動の意欲が増したようであった。5～7月は、マットやとび箱を用いて、運動の基本技能を楽しみながら取り入れることを行った(表3)。種目によっては、できる子とできない子の差が見られたり、到達段階に関わりなく、意欲のある子とあまりみられない子がいた。

②サーキット遊び

9月以降は小学校の豊富な体育器具を用いて、サーキット遊びを行った。体育器具の組み合わせ方を変えることによって、多様な動きを経験することができた(図1、表4)。

回を重ねても、環境を変えることによって、意欲的にサーキット遊びを楽しめるようにした。園児の中には「できないかも…」と戸惑う子もいたが、挑戦してみたい気持ちが持てるように援助を行ったことにより、楽しんで取り組む子がほとんどであった。

保育者は運動遊びを「動作」という視点からも理解を深め、発達課題の動作を意図的に遊びの中にちりばめておくことが必要だと感じた。しかし一方で、保育者はできるようになるための技法を教えることばかりではなく、子どもの意欲や主体性を育てていくことが重要なことであることを忘れてはならず、このような遊びを通して、「子ども同士で関わる」「応援し合う」「お互いを認め合う」など『5歳児ならではの姿』を支えていくべきであることを学んだ。

②実践における5歳児の事例

自由遊びでとび箱やフープなど、子どもたちが自由に遊べるよう登園前に準備しておいた。A児は、登園し身支度をした後、早速遊び出す友達の姿をちらちら見ては、やってみようか迷っている様子だった。少しずつとび箱に近付き、触ったり乗ってみたいしていたが、やはり助走から踏み切って、とび箱を跳び越えていけるようになりたいと思っているようだった。A児に「かっこいいね、どうやったら跳べるんだろうね?」と話しかけながら、一緒に友達



図1：小学校の体育館でサーキット遊びに取り組む5歳児の様子
ロープにぶら下がってブランコをする(左)、肋木に設置されたボールをタッチする(右)

表3：5～7月の運動遊びの内容、ねらい、子どもの様子

内 容	ね ら い	子どもの様子
マット	前転	カエルのポーズから始め、回る時はジャガイモのように小さく回り、回転後は両手を上にあげジャンプ（フライドポテトに変身）する設定にした。当初は手を着く位置が体から遠すぎたり、まっすぐ回転できない姿が見られた。すばやく立ち上がることを「おいしいポテト」と表現して、楽しむ姿が見られた。
	ブリッジ	はじめは自分の体の動きが把握できず、保育者の指示のまま行っていた。他児の様子を見ることで、徐々に動きのイメージをつかむと、ブリッジポーズをとれるや逆さ視野を楽しんでいた。
	後転	はじめは腰が上がらず、つま先が頭上まで持ち上げることができない、マットを押し切ることができず、頭が抜けない姿が多くみられた。練習を繰り返すうちに、後転ができる子が少しずつ増えてきた。
鉄棒	豚の丸焼き	丸焼きのポーズを取ったら、肘を曲げて頬を鉄棒に付けることを、おいしい丸焼きと表現した。親しみのあるポーズに新たな課題が加わり、意欲的に取り組む姿が見られた。足が鉄棒に届かない子には、鉄棒の高さを選ばず、支柱を使うなどの工夫を促した。
	ダンゴ虫	肘を曲げた状態でぶら下がり、膝をできるだけ鉄棒に近づけた。その状態で「自転車こぎ」や「足で拍手」など足の動作の課題を設定することで、友達と競い合う姿が見られた。
	前回り	はじめは鉄棒に体をのせた時に、腕で体をしっかりと支えられず、背中が曲がる子が多かった。腕で支える「小鳥のポーズ」を意識させることで、しっかりと体を支えられるようになった。着地の際に静かに降りることを「忍者降り」と設定すると、「敵に見つからないように、静かに」となりきる姿も見られた。
	逆上がり	講師の手本に興味を示し、保育者や保護者の補助や援助によって、意欲を持っていた。課題が明確なため、できた子の達成感も大きく、自信を持った表情が多く見られた。
とび箱	踏み切り	はじめは踏み切り板の手前で一度止まってから踏み切る姿が見られたが、繰り返すうちに、両足でしっかり踏み切ることができるようになった。
	跳び越し	はじめは手を床に突かず跳び上がった、手を付いた状態でお尻が上がらず、足を前方に振ることができなかった。少しずつ足を前に振ったり、リズムよく連続ジャンプができるようになった。
	開脚跳び	両足で踏み切ること意識を取られたり、遠くに跳ぶことに対する恐怖感から、とび箱の手前に手を着いてしまう姿が多く見られた。保育者や保護者が跳び越すためのリズムに合わせて「ドン・手・パッ」と声を掛けることで動作を掴むケースもあった。

表4：サーキット遊びの内容とねらい、子どもの様子

内 容	ね ら い	子どもの様子
連続ジャンプ (ケンパ) (グッパ)	両足や片足で正確なジャンプができるようになる。 連続ジャンプがスムーズになる。	はじめは足が「パッ」と開かなかったり、途中で止まったりする姿も見られた。子どもたちは頭の中で、「こは片足、次は両足」と少し先のフープを見て考え自分の両足の動きをコントロールしていた。
とび箱 (跳び乗り) (とび箱渡り) (飛び降り)	両足でしっかり踏み切ることができるようになる。 高所からの飛び降りは、安全に着地する。	3つ連なるとび箱に興味を示し、力強く助走をしていた。登ることに意識が向い、両足での踏み切りがおろそかになる場面も見られた。助走時に「ゲージャンプ」などと声を掛けると改善された。飛び降りの際は、より高く、速く、脱力してなどいろいろな方法で楽しむ姿が見られた。
肋木上り下り	四肢の力をバランスよく使うことができるようになる。 肋木を上り下りすることを楽しむ。	幼稚園にはない器具で、遊び方が分からない子もいた。はじめは怖がつて上までいけない子もいたが、何回も繰り返すうちに「さっきより上だった！」と、自分なりの目標を見出し取り組み姿が出てきた。ボールをタッチする際、手ばかりではなく、頭や足でタッチをして楽しむ姿が見られた。
的当て	正しい投動作を身に付ける。 ボールを投げ、的(フープ)に入れることを楽しむ。	はじめは目標物を見て投げることができなかつたり、しっかり腕が振れない子が多かった。しかし、手本を見せたり、コツを伝えることで投げ方が改善された子も増え、「もっとやってみよう」という意欲が出てきた。
ジグザグ走 ロープ渡り	自分の体を上手にコントロール(重心移動)しながら移動することを楽しむ。 バランス感覚を養う。	はじめは単に課題をこなす姿が多かったが「〇〇のようにすばやく！」と声を掛けること、重心を下げたり、ステップを細かくしたりしてすばやく駆け抜ける姿が多く見られた。バランスをとったりかっこよく走ろうとしたりすることを楽しんでた。
縄跳び越し	走りながら、片足で踏み切ることができるようになる。 縄の動きを見て、適切なタイミングで跳ぶことを楽しむ。	はじめは縄の手前で止まり、両足で跳び越す子がいたが、繰り返す中で走りながらスムーズに片足踏み切りができるようになった。保護者が縄の振り方を縦横大小と変化させると、より意欲的に大きなジャンプをする姿も見られた。
傾斜マットのぼり	足の裏を巧みに使いながら、斜面を登ることができる。	はじめは斜面が登れず、滑り落ちてしまう子がいた(それを楽しむ姿も見られた)。足の母指球(親指の付け根)に力を入れて上るようにアドバイスすると、徐々に登ることができるようになった。
ステージ跳び乗り	踏み切り板で両足踏み切りができるようになる。	小学校のステージは5歳児にとって高く、はじめは踏み切りではなく、よじ上る姿が見られた。両足で力強く踏み切るよう声を掛けると、徐々に上ることができるようになった。
ロープブランコ	握力と手足を使って、しがみつく力を養う。 ロープブランコで揺れる感覚を楽しむ。	はじめは保育者に押ししてもらい揺れる感覚を楽しむ姿が多かったが、徐々に、助走を着けて跳びつく、足を振るなどして、大きく揺らす工夫が見られるようになった。

が跳ぶ様子を見ていた。

その後、担任はA児が跳べるように「どこに手をつくといいかな」「だんだんお尻のつくところが少なくなってきたよ」など、子どもがイメージしやすい言葉がけを行い、子ども自身が失敗しても何回でも取り組み、その中で考える機会が大切であるという思いをもって援助を行った。

実際、数日後には、A児は跳べるようになり、「すごいね！いつの間に跳べるようになったの？」と声をかけると、「こっちも跳べるよ。見てて！」と、一段高いとび箱や、縦向きのとび箱も跳んで見せた。このときのA児の言葉や表情からは「自分で跳んだんだ」という自信や達成感が十分伝わってきた。幼児期において誰かの助けを借りたのではなく、自分の力でできたと実感する経験の積み重ねによって子どもは有能感を持ち、主体性や自立心が育まれていくのである。

この事例で「とび箱を跳ぶ」という目標は保育者ではなく、子ども自身が決めたものだからこそ、主体的に取り組めたことも大きな要因である。

その主体的に取り組む子どもの姿と自分の保育を振り返り、次につながる環境を構成し、子ども一人一人適した援助をすること、この繰り返しによって意欲的に体を動かして遊ぶ子どもが育つのである。保育者は、子どもができた喜びを伝えにくる姿に喜

びを感じながらも、「子どもができるようになった」という結果ばかりではなく、日々の保育の中で主体性を持って意欲的に取り組むための援助ができたかという保育の指導の評価を忘れてはいけない。

(2) 4 歳児の実践について

①友達と一緒にゲームを楽しむ

一般的に、4 歳児は友達を求め、好きな子や気の合う子ができる時期である。その中で、自分と友達を比べて、友達と一緒にであることを喜んだり、自分が友達よりできていないと悔しいと感じ始める時期である。

T 園の 4 歳児の保育室は 5 歳児の隣りにあり、園庭でともに遊んでいるため、4 歳児は 5 歳児の刺激を受けやすい環境となっている。運動会に向けて、5 歳児がパラバルーンや組体操に取り組んでいると「すごいな」「こんなふうになりたいな」という尊敬や憧れの気持ちを抱き、見ているうちに自然に体が動くようであった。その一方で、体を動かすことに恥ずかしさや抵抗を感じている子どもや、勝敗のあるゲームを行うと、勝ち負けを意識し過ぎて途中で抜けてしまったり、悔しくて怒り出したりする子どもの姿が見られた。4 歳児ではチームに分かれてタイルをめくり合う「タイルめくり競争」を行った(表 5, 図 2)。

表 5: ゲームの内容とねらい、子どもの様子

内 容	ね ら い	子どもの様子
タイルめくり競争	<ul style="list-style-type: none">・友達と協力をしてゲームを楽しむ。・ねばり強く動き続ける力、素早く方向を変える力を高める	自分のチームのタイルの色を多くするというルールを理解し、子どもたちは同じチームの友達と「エイエイオー」とかけ声をかけあったり、ゲームの中で「あそこにあるよ」など教えたりして自分たちの色のタイルが増えるように張り切っていた。技能に関して、はじめは友達とぶつかったり、転倒する姿も見れたが、徐々に切り返しのスピードが速くなったり、転倒が少なくなった。



図 2: 園庭で遊ぶ 4 歳児の様子

年長児の真似をしてダンスをする(左)、2 チームに分かれ、タイルめくり競争をする(右)

②実践における4歳児の事例

チームに分かれて「タイルめくり競争」を行い、多くの子ども楽しんでいる中、「見てる…」と言って、隅の方へ行ってしまふB児、C児の姿があった。ベンチに座り、みんなが遊んでいる様子を見ながらも二人で話したり、笑ったりとゲームをやってみようとする気持ちはないように感じた。「今日は見てる人？」と保育者が声をかけると、二人そろって「うん」と答え、その日は参加しなかった。

このときC児はゲームに参加しようか葛藤していたが、同じ気持ちをもつB児がいたため、B児と一緒に参加せず見ているということになったと思われる。担任はもう少し誘いかけるべきか悩んだが、2人だけ見ているという特別な親密感を感じていると思ったこと、また、2人は身体を動かすことは嫌いではないということから、その時は2人見て過ごす時間を認めた。

後日、チームに分かれて「しっぽとり」を行った際、張り切って相手チームのしっぽを取ろうとしているB児とC児の姿があった。この事例から、日頃、友達と楽しく遊んでいる子どもなら、時には見守ることも必要かと感じた。

保育者はその発達を理解し、相手に勝つことやできるということのほか、その場の雰囲気を楽しむということを認める必要がある。子どもが楽しく遊べるよう、参加する意欲の大小の程度に関わらず、活動が面白くなる工夫や、その子どもにとっての「楽しい」という前向きな実感がもてる言葉をかけていくことが大切である。

(3) 3歳児の実践について

①イメージをもって、なりきりながら体を動かすことを楽しむ

3歳児になると、鬼ごっこで「追う、追われる」という簡単なルールが分かり、保育者や友達を追いかけることや捕まらないように逃げるスリルを味わうことを楽しむようになる。T園の3歳児は保育者と一緒に「引越し鬼」などの遊びを楽しんでいる。

また、なりきる遊び（ごっこ遊び）や、物を見立てて遊ぶことが楽しくなるという姿が見られる。

例えば、鬼ごっこにおいて、絵本の世界をイメージし、保育者が「おおかみ」になって追いかけて、子どもは「こぶた」になって逃げたり、わらの家を探したり、おおかみに話しかけたりすることで、子どもたちにとって鬼ごっこがより楽しい遊びになっていく。

9月以降は、5歳児のサーキット遊びを参考に、3歳児に合ったサーキット遊びの環境を3歳児保育室の前に準備した。すると、多くの子どもたちが興味を示し、両腕を広げて平均台を慎重に渡ったり、巧技台に登って、膝の屈伸を利用して少しでも遠くに跳び下りようしたりすることを楽しんでいた。サーキット遊びにおいても、子どもたちが好きな絵本「おむすびころりん」をイメージし、子どもがねずみとなり、大きなおむすびをゴール（家）まで運ぶ設定にしたところ、とても楽しそうにサーキット遊びに取り組んでいた（図3）。

②実践における3歳児の事例

D児は平均台や巧技台に興味をもち、自分から取り組み始めた。しばらく1人で遊んでいたが、より



図3：園庭で遊ぶ3歳児の様子

保育者と引越し鬼をする（左）、おむすびころりんの世界でサーキットあそびを楽しむ（右）

子どもがイメージをもって楽しめるように、保育者は次のような援助を行った。

平均台の上にいるD児に「落ちるとサメに食べられちゃうから気をつけてね」と言うと、「え～っ、怖い」と言いながらもイメージの世界に入りこみ、海に落ちないように、サメに食べられないように、より注意深く、集中して取り組む姿が見られた。

渡り切ったD児は、保育者に「大丈夫だったよ。先生も来て」と手招きをして呼んだ。保育者が渡る姿を見ながら「サメが来るよ」と言ったり、渡り切ると「やった～、よかったね」と保育者が渡れたことを一緒に喜んだりした。D児は保育者も自分と同じ世界にいると感じ、一緒に「できた」ことを喜び合うことでより楽しんで体を動かさせたと思われる。

3歳児は1人での遊びを楽しむことから、人の存在を感じ、保育者や友達と関わった遊びを楽しむ時期である。そのため、徐々に人と関わって遊ぶことができるような援助が求められる。

子どもの発達も踏まえながら、運動遊びの中でも、1人でじっくり遊ぶという大切な時間を奪わないようにすることに加え、人と関わる遊びに発展させるために、保育者が子どもの育ちをしっかりと観察し、一人一人の子どもに合った声かけなどの援助の内容を考慮することが大切である。

(4) 運動遊び、園内研修を通して見られた保育者の変化

月に一度、講師による子どもと保育者への運動遊びの指導に加え、8月の夏季休業中に全保育者に対し、運動遊びについての研修を行った。

園内研修においては、運動遊びで運動技能ばかり

を教えるのではなく、体を動かす楽しさはもちろんであるが、順番に並んで待つこと、ルールを守ることなどの規範意識や、友達を応援する、力を合わせるといった社会性も育てていくことも、保育者の援助で大切な事柄であることを共通理解した。

次に、年次ごとに、どんな運動遊びを取り入れていくとよいかを3～5歳児の指導計画例を参考にしながら作成した。また、例えば、5歳児でとび箱の6段を開脚跳びができるようにするために、4歳児では3段程度の低いとび箱を用いた踏み切り遊びや、踏み切った後、とび箱の上にまたがるといった遊びを取り入れる、3歳児で小さいフープを両足でジャンプする遊びを取り入れるなど5歳児の運動遊びから、4歳児、3歳児で行う遊びを検討した。

ほかにも、クラスの中に体を動かすことが好きな子と苦手意識をもっている子、または初めてのことに慎重で見ている子どもなど個人差を考慮し、その子に合ったねらいや関わりを検討した。

この研究期間を通して、「今まで逆上がりでは、逆上がり機（補助板）を使ったり、足を上に蹴り上げることを指導していたが、ダンゴ虫のポーズを教えることで腕を曲げる、おなかをくっつけるということが自然にでき、子どもがイメージしやすい声かけができるようになった」「以前より、具体的でわかりやすい声かけができ、指導しやすくなった」と指導の仕方に変化が見られた。また、「講師が行った運動遊びを、日々の保育に取り入れていこうとする気持ちが保育者の中に増した」と回答するなど、園全体の雰囲気にも変化が見られたようであった。

子どもが上手にできなかった場合、保育者は子ども自身が解決の方法を考えるには、どうしたらよい



図4：運動遊びに参加する保護者の様子

鉄棒（ダンゴ虫）の補助をする（左）、園児と向かい合ってキャッチボールをする（右）

かを考え、ときには、子どもと一緒に考えることが必要である。

失敗は一度とは限らないし、方法が上手く見つけられずに断念することもあるだろう。そのような「悔しかった経験」もまた、子どもたちの心身の成長につながると考えられる。日々の保育で、子どもが「自分の力でやった、できた」という主体性や自立への育ちを見出し、保育者としての喜びを感じられる日々をどうつくるかが求められている。²⁾このように、運動遊びを通して、一人一人の保育者が試行錯誤を繰り返しながら、この保育の醍醐味とも言える「援助」を考え実践していくことが大切であると共通の理解を深めた。

(5) 保護者の意識変化

T園の保護者に対するアンケート結果(表1)では、日ごろ、幼稚園でどのような運動遊びをしているのかについて関心がある保護者が多かったこともあり、保護者に対し、子どもにとって必要な運動遊び、やる気が出る声かけなどの援助のあり方、補助の方法について理解を深めてもらうために、毎月の運動遊びの時間の手伝いを募った。小学校の体育館に初めて入る保護者も多く、その広さに驚いたり、体育器具を組み合わせたサーキット遊びや意欲的に取り組む子どもたちの姿に興味深そうに見ていた。

講師が子どもに対し、運動の指導をしながら、補助の仕方を保護者に伝えた。鉄棒の逆上がりができるようになるための基礎的な力の養い方(ダンゴ虫のポーズ)や、回転の際に腰を下から支える補助の方法、ボール投げをする際の足、腰の動きについて熱心に聴き、体得していた(図4)。適切に補助をすることで、思わぬけがを防ぐこともでき、親子で一緒に、公園などで遊ぶ際にも役立つ技術が身に付いたと思われる。

保護者の中には、自分の子どもの運動遊びの様子や、運動能力も分かることから、毎月参加する保護者も見られた。幼稚園における子どもの生活の様子、成長を保護者が実際に見ながら、園の活動への理解や協力を得るという点からも有意義な取り組みであった。

IV. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

T園の保育者は「子どもが自分から体を動かすた

めにどうすべきか」という視点をもつこと、とび箱を跳び越したり、逆上がりをするためには、多くの遊びを通して身に付く能力が大きく関与していることを共通理解した。また、サーキット遊びなど環境設定や一人一人に合った援助を行うこと、安全な補助の仕方が理解できるようになった。

園児について、「自分から戸外で体を動かす遊びをしたり、とび箱や鉄棒などを意欲的に練習したりする姿が増した」「体を動かすことが苦手な子ども運動遊びに喜んで参加するようになった」「サーキット遊びを通して、体のいろいろな使い方を覚えたことで体がうまく使えるようになってきた」と保育者は変化を感じることができた。また、運動の場面以外にも、「列で並ぶ、集まるなどの行動のすばやさにも影響があったように思う」「何事にも挑戦する気持ち」「最後までやる粘り強さ」など園での生活や精神面への変化、「友達と力を合わせて取り組む充実感などを感じながら活動に取り組む姿が多く見られた」など、社会性が高まっていくことを感じることもできた。

さらに、保護者に対してアンケートを行ったり、活動に参加する機会を設けたりすることで、運動遊びに興味や関心が深まり、子どもと一緒に体を動かす楽しさを感じながら、子どもが楽しく体を動かすための保護者の役割を考えるきっかけとなったと思われる。

これらの結果、さらに、「運動遊びを楽しみにする雰囲気が増した」「とび箱など年長が取り組んでいる姿を見て年中もまねして取り組んでいた」というように、園全体に運動遊びを楽しむような環境が生じた。

(2) 今後の課題

本研究では、多様な動きを経験、獲得するために、大学、保護者と連携をして、小学校の体育館などを使用し運動遊びを行った。

今後は、日々の保育の中で多様な経験ができるよう環境設定を行い、体力や運動能力を高めていけるようにしていきたい。また、子どもの「やりたい」という、意欲が向上するように子どもが巧みさや回数、時間などの達成度を実感し、目標とすることができるような評価の仕方について工夫をしていきたい。

T園を卒園した子どもたちが、小学校において発展的な、学びをするために、小学校の体育の授業を見学したり、小学校の先生から助言を受けたりして、

就学前に必要な力を育てるための情報やニーズを把握しておきたい。

また、今後も保護者と連携して、継続的に運動遊びを行うことで、どのような運動遊びを家庭で取り入れていくとよいか、また、親子の関わり方を伝えることで、幼稚園と家庭が協力をして子どもを支えていきたい。

参考文献

- ・幼児期運動指針
- ・岡健,「保育者が主体的に研修・研究に臨むためにー保育が「援助」であることとの相似性ー」, 幼稚園じほう

執筆分担

山下：第Ⅱ章, 第Ⅲ章 (3), 第Ⅳ章 (2)
中村：第Ⅲ章 (4), (5), 第Ⅳ章 (1)
内木：第Ⅰ章
浅川：第Ⅲ章 (1), (2)